「大陸浪人」の項目はない。個別研究として、僅かに初瀬竜平『伝統的右翼内田良平の研究』（九州大学出版会、一九八〇）が挙げられるだけではあるまいか。本書を契機として、わが国でも大陸浪人に関する研究が本格的、組織的に進められることを期待してやまない。

（一九九三・一・一五）

（一九九一年四月、北京、中国大百科全書出版社、A五判、三〇五頁）

アリス・シャールキョジ著

十七～二十世紀のモンゴルにおける政治的予言

宮脇　淳子

本書の著者アリス・シャールキョジ博士は、ハンガリーの科学アカデミーに所属するモンゴル学者で、長くモンゴル語版『マハーヴュトパッティ Mahāvyutpatti』（翻訳名義大集）[1]の研究に従事し、博士号を取得した。ただしその『マハーヴュトパッティ』の研究は、ハンガリーの出版事情で順番待ちのため、残念ながら未刊行である。

彼女は常設国際アルタイ学会 Permanent International Altaistic Conference の古くからの主要メンバーの一人で、毎年の学会では、東欧圏、旧ソ連に所蔵されている様々なジャンルのモンゴル資料の研究や、モンゴルの現地調査に関する報告を行っている。当然のことながら、モンゴルにおけるチベット仏教やシャマニズムに関して造詣が深い。彼女が行ってきた興味深い研究発表のいくつかを評者自身も聞いているが、英文の著書が出版されるのは始めてではないかと思う。

本書はハンガリーの Akadémiai Kiadó とドイツの Otto Harrassowitz の共同出版であり、従って Bibliotheca Orientalis Hungarica, Vol. XXXVIII であると同時に、Asiatische Forschungen, Vol. 116 でもある。

目次を見ると、番号はないが、大きく五つに章立てされている。便宜上ここでは章に番号を附して訳出する。

第一章　はしがき　7頁
資料　8頁
文学の特殊な一形態としての予言　13頁
モンゴルの予言書における宗教混交　16頁
第二章　中国起源の予言書　19頁
ハンガリー科学アカデミー所蔵　Mong. 75　23頁
Esrua（梵天）と Qurmusta（帝釈天）の教訓　43頁
第三章　チベット起源の予言書　60頁
パンチェン・ラマの布告　62頁
聖パンチェン・ラマ、ダライ・ラマ猊下、聖チンギス・ハーンの御命令　67頁
六道の衆生の利益のためにダライ・ラマが Rgyon-byong 猊下に送った勅令　75頁
第四章　超自然的存在によって運ばれた予言書　79頁
第五章　ジェブツンダンバ・ホトクトたちによる予言書　83頁
ジェブツンダンバ・ホトクト四世の道徳的教訓　83頁
ジェブツンダンバ・ホトクト五世の教訓　93頁
ジェブツンダンバ・ホトクト八世による予言類と教書類　97頁
ジェブツンダンバ・ホトクト八世の書簡類、写本と木版の目録　111頁
ボグド・ゲゲーンの教訓　116頁
聖ゲゲーンの予言　118頁
ジェブツンダンバ・ホトクト八世の書簡　127頁
ボグドの予言　132頁

以上に、略語表、注、文献目録が附されている。

著者による予言書の定義とは、以下の如くである（13–15頁）。

（1）その起源は超自然的で、人間によって書かれたものではない。例えば、天命が石版に刻まれて聖なる山の頂や岩の割れ目に直接落下する如くである。

（2）不正のはびこる邪悪な世界の描写が予言書の共通の主題である。

（3）世界の終わりの前兆が現れる。異常な自然現象が災害の到来を告げる。「赤い雨が降り、その臭いをかいだ者は誰でも翌日の夕刻までには死ぬだろう。」

（4）不道徳な行為の報いを生き生きと描写する。「ゲル（天幕）はあっても住む者はおらず、道があっても歩く者はない。穀物はあっても誰も収穫しない。」

（5）このような災禍から脱出できる唯一の方法は、常に聖なる教団を頼ることである。

（6）このような予言文学の目的は何か。「世界の災禍で人々を脅し、難を避ける方法を示す目的はただ一つ、人々を教団により縛りつけ、服従を強化し、同時に上流階級の支配を安定させることであった。」

未来の予兆を信じない人々はいないから、予言は人類自身と同じくらい古くから存在し、予言書は世界中ほとんどすべての文化に見られると、著者は言う。モンゴルの予言書は、ハイシッヒ Heissig 教授、ボーデン Bawden 教授、モンゴルの学者ジュグデル Zhugder 氏などによって言及されているので、世界各地の図書館に数多くの文献が存在することが知られてはいたが、これまで一篇の専論も書かれたことはなく、資料が公刊されることもなかった。

本書の著者は、ハンガリー科学アカデミーといくつかの個人蔵書、東欧圏の図書館のコレクションの原本あるいはコピーを手に取って研究し、モンゴル国とレニングラードのコレクションも調査する機会に恵まれた。本書では十三の文書のテキストのローマ字転写と英訳が注を附して挙げられているが、すべてが初公刊の資料である。しかもそれらは、それぞれの典型的な予言書の代表として転写と翻訳が公刊されたのであって、構成や主題や目的などを比較した文書数は一七〇にのぼるという。ただ、おそらく非常に多く所蔵しているに違いないロシア連邦ブリヤート自治共和国の首都ウラーンウデのコレクションを見ることができなかったのは残念であり、また中華人民共和国内蒙古自治区にも所蔵の文書があるだろうと、著者は言う。

以下、章を追って内容を紹介する。

第一章では、前述の予言書の定義の他、モンゴルにおける予言書の伝統について考察が進められる。予言書の最も重要な考え方はモンゴルにも早い時期から存在したが、中国とチベットから翻訳を通して入った材料で、モンゴルの予言書は豊かになった。中国の思想に関しては、天命、河図洛書、八卦、讖緯、茅山派、録図などについて要領よく紹介する。一方チベットでは、十四世紀に自らの歴史に興味が増して（これは、モンゴルの統治下でチベットに中国文明の影響が及んだためであると評者は考える）、歴史文献がテルマ gter ma（地中に隠されて掘り出された宝、過去に書かれて埋蔵されていた文献）として多く世に現れるようになる。テルマは十七世紀以後のモンゴルでも広まり、例えばパドマサンバヴァの生涯に関する伝説集が、チ

ベット語原本を基礎として、一七一二年にモンゴル語で書かれた。終末論の思想は、中国とチベット両方からモンゴルに入った。

第二章の第一の文書「ハンガリー科学アカデミー所蔵Mong.75」は、リゲティ Ligeti 教授が一九三一年に内モンゴルから将来したものである。このような書物は、古く役立たなくなっても、捨てたり焼いたりすることは罪深い行為であったので、僧侶たちはこれを乾いた壁の中に塗り込めた。Mong.75もこのような状態で発見され、きわめてよく保存されているが、今でも紙の間に砂粒が残っている。21×8.5cmの小さな紙に十三行ずつ書かれて四一枚ある。一枚目は紛失し、奥書もないが、書写の形式や紙質や言語の特徴から十七世紀の文書と考えられる。

本文の英語全訳の他に、最初に詳しい内容紹介と解説がなされる。この書物は弥勒菩薩への祈願から始まり、仏教的な衣をまとっているが、途中で孔子の枕中書が挿入されるなど、中国起源であることが明白である。十二支の生まれ年による運命の違いや、罪と報いなどの描写の中には、オンゴン（シャマニズムで崇拝される偶像）等のモンゴル的要素が混在している。

第二の文書「梵天と帝釈天の教義」は、各地の図書館に所蔵された類似の二十二件の文書の代表として、若干の異同のある二件の同一文書の転写と翻訳が挙げられる。二十二件の文書の中には、内容と題名がともに類似のものと、内容は同一であるのに異なった題が附いているものとがある。最も多く所蔵しているのは、LOIVAN（科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部）の十八件で、もちろんカタログ番号も附せられており、そのうち十二件がカルムィク写本である。その他にマルブルクのカルムィク写本、レニングラード大学所蔵本、著者が利用した個人蔵書二件があり、各文書の枚数や、あるものについては書写の日付、脱落箇所など詳細に述べられる。

第三章の三つの文書は、内容が相互に関連があるので、ここにまとめて挙げられる。類似の題を持つ文書がLOIVANに十九件、レニングラード大学に一件、ドレスデンに五件（ハイシッヒ教授がすでに紹介）、ハンガリー科学アカデミーに二件所蔵される。

第一の文書「パンチェン・ラマの布告」は、内モンゴルのドローン・ノールのシャラ・スメ（黄寺）で印刷された。「五年間の災禍の結果、九割の人々が死に、九人の妻が一人の夫に従うだろう。青い鼠の年（甲子）から人々の苦しみはいっそうひどくなる。白い馬の年（庚午）から困難は回復に向かい、平和になる。この間は多くの人にとって非常に危険である。第一の危険は大火、第二は洪水、第三は

嵐、第四は牛の病気と雷、第五は蛇と野獣の危険、第六は敵軍、第七は泥棒と強盗、第八は飢えと乾き、第九はこの世の人々が平和を見いだせないこと、第十の危険は夫婦、息子や娘が別れ別れになること。時はすでに至っている。このような災禍から逃れるのは非常に困難である。死体が峡谷を満たし、河には血が流れるだろう。たとえ道はあっても歩く者はおらず、ゲルがあっても住む者はいず、服があっても着る者はいない。富んでいても貧しくても同じである。ただよい悪いが見分けられる。」

この後、中国南部の地名を挙げてその災禍が如何に大きいかを描写するところから、甲子は一八六四年、庚午は一八七〇年のことで、同治年間の騒乱を指しており、パンチェン・ラマは五世であろうと評者は推定する。

続いて次のようにある。「もし本当の信仰を持って命令に従い、不道徳な態度を改め、価値のある生き方をするならば、災禍から救われ、よい時を見ることができる。この命令の書を多くの衆生に伝え書き広めよ。一回写し伝えたなら自分自身の苦痛が鎮まる。十回写し広めたなら家族すべての苦痛が鎮まる。百回写し伝えたなら一つの村すべての苦痛が除かれる。」

第二の文書は、その強い反中国感情の描写から考えて、ジェブツンダンバ・ホトクト八世の時代に写され広まったものであろうと著者は言う。他の多くと同じくこれらは文殊菩薩の予言で、天から五台山の頂に降ったと考えられた。「狼の西側に朱姓の一人の男の子がいる。東側に真鍮のイナゴがいる。その南側に廖姓の一人の男の子がいる。真鍮の牛がいる。西の門に文殊がいる。黄色い門に大黒がいる。青い門にラモ天女がいる。これらすべての真ん中に一つの門がある。その西側に真鍮の鼻面の犬がいる。これらすべて中国人を捕えて食うので、自ずと業は成就するのである。聖者のお言葉は、中国の布靴を履くな、白帽をかぶるな。四月三日からは中国人と口を聞くな。[かれらは]作物を食う虫である。タルチョ（旗）を風になびかせよ。人々によく広めよ。」

チンギス・ハーンもこう言う。「七月に鶏卵を食べるな、食べると中国人の病気にかかる。」

モンゴル語は日本語とよく似た語順を持ち、「てにをは」などの後置詞がつく膠着語であり、主語がしばしば省略される。英語に翻訳するのは非常に難しい仕事だろうと思う。特に予言書はわざと意味を謎に包んであいまいに記すから、英語訳だけを読むと原文のニュアンスはわからない。誤訳もないわけではない。しかし、我々が普通利用しているいくつかのモンゴル語辞書にない珍しい単語、例えば病名なども訳出されているのは、著者が長く『マハーヴ

ュトパッティ』の研究に従事してきたからこそ可能であった作業であろう。伝統的モンゴル文字にはaとe、oとu、öとü、dとt、gとk、qとγの区別がないから、ローマ字転写を行った時点で翻訳作業の半ばまで至ったことになる。資料の原文の全転写が掲載されているので、我々は英語訳を参照しながらモンゴル語から直接日本語に訳すことができる。価値のある業績であると思う。

モンゴル史の分野から言えば、本書の中で最も価値が高いのは、第五章「ジェブツンダンバ・ホトクトたちによる予言書」である。著者も同じ考えであったようで、第五章が本書の三分の一以上を占めている。ただ、著者は歴史学者ではなく、十七～二十世紀のモンゴル史研究は欧米でも未だに盛んでないため、一世から八世まで転生したジェブツンダンバ・ホトクトに関する解説が不十分で、すべてチベットに転生したと説明するのも誤解を招きやすい。今後本書を利用する際に便利なように、ここで評者による説明をつけ加える。ただし、生没年と享年が一致しないものがあるのは、資料によって伝承に異同があるためである。(2)

ジェブツンダンバ・ホトクト一世ロサンテンペイギェンツェン Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan (1635-1723)は、チンギス・ハーンの後裔のハルハ・モンゴルの王侯ゴンボ・トシェート・ハーンの息子に生まれた。彼は五歳で出家の戒を受け、チベット仏教のチョナン派の高僧ターラナータの化身と認定された。彼は一六八八年西隣のオイラットがハルハに侵入した時、率先して清の康熙帝の保護を頼り、全ハルハの清朝帰属のきっかけをつくった。このため康熙帝に優遇され、ハルハ最高の宗教指導者と認められた。一世は康熙帝崩御の知らせを聞いて北京に赴き、そのまま北京のシャラ・スメ（黄寺）で九十歳で示寂した。

二世ロサンテンペイドンメ Blo bzang bstan pa'i sgron me(1724-1757)は、一世の兄チャグンドルジ・トシェート・ハーンの孫、ダルハン親王ドンドゥブドルジの息子に転生した。オイラットのジューンガルが清朝に滅ぼされた直後、三十四歳で天然痘で示寂した。

三世イェシェテンペイニマ Ye shes bstan pa'i nyi ma(1758-1773)は、清の乾隆帝の意志に沿ってチベットのリタンに転生した。十六歳で示寂。

四世ロサントゥプテンワンチュク Blo bzang thub bstan dbang phyug(1775-1813)はチベットに転生、三十九歳で示寂した。

五世ロサンツルティムジクメ Blo bzang tshul khrims 'jigs med(1815-1840)は、チベットに転生、二十八歳で示寂した。

六世ロサンペンデンテンペイギェンツェン Blo bzang

dpal ldan bstan pa'i rgyal mtshan(1843-1848)はチベットに転生、イフ・フレー（いまのウラーンバートル）に着いて僅か五十九日で、天然痘により六歳に満たずに示寂した。

七世ガワンチョエインワンチュクティンレギャツォ Ngag dbang chos dbyings dbang phyug 'phrin las rgya mtsho(1850-1868)はチベットに転生、二十歳で示寂した。

八世ガワンロサンチョエキニマテンジンワンチュク Ngag dbang blo bzang chos kyi nyi ma bstan 'dzin dbang phyug(1870-1924)は、チベットのダライラマの側近の息子に転生し、一八七四年イフ・フレーに坐床した。八世の生年については資料によって異同がある。一九一一年十月、辛亥革命が起こり清朝崩壊が明らかになると、同年十二月ハルハ・モンゴルは、ジェブツンダンバ・ホトクト八世を元首に推戴して、清朝からの独立を宣言した。元首となった八世の正式の称号は、Šasin törö-yi qooslan bariγči naran gereltü boγda qaγan(宗教と政治をふたつながら掌握する者、日光の如き皇帝)で、年号は Olan-a ergügdegsen（共戴）と定められた。[3] ボグド・ハーンという称号は単に皇帝を意味するモンゴル語で、ハーンになる前のボグド・ゲゲーンという呼称は、お上人様という意味の敬称であった。

この独立宣言は、ロシアの不徹底な政策により自治宣言にすりかえられ、一九一七年ロシアで社会主義革命が勃発すると、増強された中国軍に包囲されて、ボグド・ハーン政府は自治を返上させられた。やがてブリヤート・モンゴルのキャフタで結成されたモンゴル人民党がウルガ（イフ・フレーのロシア名）を占領し、一九二一年七月に、ジェブツンダンバ八世すなわちボグド・ハーンを元首に推戴する臨時人民政府を樹立した。八世が五十五歳で示寂した後、転生は認められず、一九二四年にモンゴル人民共和国が誕生したのである。

第五章の中でも「ジェブツンダンバ・ホトクト八世による予言類と教書類」は、類稀なる歴史資料である。「書簡類、写本と木版の目録」によると、LOIVAN に七十八件、コペンハーゲンに二件、ウラーンバートルに二件、オスロに二件、マールブルクに二件、テュービンゲンに一件、合計八十七件の文書が所蔵されている。そのうち二十余件は他の文書と内容が同一であるが、それにしても、ジェブツンダンバ八世自身が著した文書類がこれほど多く現存するとは、評者は寡聞にして全く知らなかった。その中で五文書だけが転写、翻訳されている。言うまでもなく、目次で文書の題として便宜的に挙げてある「ボグド・ゲゲーン」「聖ゲゲーン」「ジェブツンダンバ・ホトクト八世」

「ボグド」は同一人物を指している。

ジェブツンダンバ八世の予言や教書の様式は、前章で見てきた伝統を受け継いでいる。その中で反中国的表現がいたるところに見られるのは、予想通りである。

ジェブツンダンバ八世すなわちボグド・ハーンは、中国側の史料では、ただ暗愚で放蕩なラマであった如くに記され、ロシア側にもほとんど史料がない。モンゴル人民共和国でも積極的に研究されたことがなかった。しかし、一九九〇年以来、社会主義を放棄したモンゴル国にとって、ナショナル・アイデンティティの根拠として、ボグド・ハーン時代の見直しは今や最緊急課題となっている。本書の著者がこれを見越して研究を進めていたのかどうかは評者の知るところではないが、本書の刊行は極めて時宜を得たものであると言えよう。

註

(1) 九世紀初めにチベットで作られた、サンスクリット語とチベット語対訳の仏教術語辞書で、仏教教典の翻訳に際して、欽定決定訳語とされた。チベット語の書名は Bye brag tu rtogs par byed pa chen po である。清代の十七～十八世紀には漢語訳、モンゴル語訳、満洲語訳本が完成し、世に出た。

(2) 資料として使用したのは、以下の諸本である。*The Autobiography of the First Panchen Lama Blo-bzang-chos-kyi-rgyal-mtshan*, ed. by Ngawang Gelek Demo, New Delhi, 1969 (Introduction by E. Gene Smith). C. R. Bawden, *The Modern History of Mongolia*, London and New York, 1989. A. M. Pozdneyev, *Mongolia and the Mongols*, Indiana University, Bloomington, 1971.

(3) ジェブツンダンバ・ホトクト八世が一九一四年に実際に使用した印璽の刻文による。Urgunge Onon and Derrick Pritchatt, *Asia's First Modern Revolution, Mongolia Proclaims its Independence in 1911*, Leiden, 1989.

(Alice Sárközi, *Political Prophecies in Mongolia in the 17-20th Centuries*, Akadémiai Kiadó. Budapest, 1992. 165pp.)